

# 低炭素社会 構築研究 サテライト拠点に

## 尾崎教授のカーボン研究成果で

群馬大学

群馬大学が提案している「アドバンストカーボン構造・機能相関解析研究拠点の整備構想」が、このほど、文部科学省の「低

炭素社会構築に向けた研究基盤ネットワーク整備事業」に採択された。同

大大学院工学研究科のカーボン研究成果が高く評

価された形で、同整備構想によりカーボン材料の測定・評価を行う高度解析装置を導入。サテライト拠点として、水素エネルギーによる低炭素社会実現に向けた研究を推進する。

同事業は、2020年に温室効果ガスを90年比で25%削減するという目標を達成するために必要な革新的な環境・エネルギー

技術の実用化や、ナノテクノロジーの飛躍的發展を図ろうと、研究基盤を整備するため、東京大学など3カ所のハブ拠点と、群馬大学や東北大学などの15カ所のサテライト拠点を設置し、実用化の加速に役立つ研究機器を整備するとともに、研究拠点間のネットワークを構築するというもの。

同大学では、低炭素社会実現のために、カーボン材料の活用により、水素を作り、ため使う「水素エネルギー社会」を目指す。燃料電池に使用

される高価な白金触媒の代替品として、炭素材料を使用する研究を進めてきた同大学院工学研究科の尾崎純一教授が研究グループリーダーとなり、燃料電池用白金代替触媒（カーボンナノシエール）の実用化や、水素吸蔵および製造材料の開発を進める。

同事業では、そのために必要な「自動ガス/蒸気吸着量測定装置」「高圧ガス吸着量測定装置」「触媒分析装置」「電子スピン共鳴装置」「レーザラマン分光装置」を導入し、研究を加速させる。予算額は約1億4000万円。また、学外研究者にも機器を利用してもらうことで、同大学をカーボン材料の構造と機能解析する研究拠点として発展させる。

同大学は採択されたポイントとして、大谷杉郎名誉教授から尾崎教授まで半世紀以上にわたってカーボン材料研究の蓄積があることや、カーボンナノシエールの開発力、カーボン材料に関する研究力などを例に挙げ、群馬大学が誇るカーボン研究成果が評価された」としている。